

鳴海 健太郎（なるみ・けんたろう）

1、プロフィール

郷土史家として多くの論文、著書を発表する傍ら、作家の求めに応じて下北に関する資料を提供し、作品の誕生に寄与した。自らも作家や作品の紹介を多数行った。

<生没>

1931(昭和6)年6月9日 ~ 2018(平成30)年6月6日

<代表作>

「下北人物伝」(「ウイーク下北」連載)

「下北点描」(「ウイーク下北」連載)

「捨て身の旅路」(「北の街」連載)

<青森との関わり>

浅瀬石村(現黒石市)生まれ、小学生の時に父の商売の関係で大畑町に転居した。

2、作家解説

郷土史家としての活動は地域で郡を抜いていた。

下北を愛し、下北の人と文化を信頼する探究の人であった。

史実の掘り起こし、掘り下げを本務とし、常に民衆の視点での歴史評価を持ち続けた。

文学と歴史の接点も鳴海氏にとっては下北を宝石と化す材料となった。

佐井の多賀丸と三浦哲郎の「望郷」、川内の中川五郎治と吉村昭の「北天の星」「花渡る海」、恐山と寺山修司の「田園に死す」、斗南藩と早乙女貢の「続会津士魂」、津村節子の「流星雨」、川島雄三と藤本義一の「いきいそぎの記」等、作品の誕生にいろいろ関わった。

その文学との距離は、地元紙「ウイーク下北」に示された。「下北人物伝」という連載の中で下北を訪れた作家、下北を舞台にした作品の作者を、詳細な調査の

上で紹介した。安藤姑洗子・久生十蘭・三好達治・岡本太郎・木俣修・柳田国男・網淵謙錠・土屋文明・司馬遼太郎・中里介山・十返舎一九・島崎藤村と、対象分野の広さは文学専攻の者を凌ぐほどである。

専門の下北の歴史に関しては、同系史家を「資料分析・資料批判が不足」「地元の間が他所の者の作品を問題視せよ」「感動を呼ぶ史誌を書くべき」と手厳しかった。

「下北はおもしろい」「下北にはもっと注目していいこと、いい人がたくさんある。」と熱っぽく語り、「川島雄三」に関する文献も多く残した。

なお、歴史関係の著書には、『下北の海運と文化』『下北地方史談』『大畑歴史稿』『下北地方史年表』『下北海運史年表』『下北文献目録』があり、また共書として『日本海海運史の研究』『民衆としての東北』がある。